

論文

高校生における瘦身願望に影響を与える 心理的要因の検討

後 藤 優 奈

〔抄 録〕

本研究では、高校生における瘦身願望に影響を与える心理的要因について、ジェンダー・アイデンティティ及び自己愛的脆弱性が、どのような影響を与えているかを明らかにすることを目的とした。調査は高校生を対象に質問紙調査を実施した。分析の結果、①ジェンダー・アイデンティティの「一致一貫的性同一性」が男女ともに、②自己愛的脆弱性の「潜在的特権意識」が女子において、③自己愛的脆弱性の「承認・賞賛過敏性」が男子において、それぞれ瘦身願望に影響を与える心理的要因であることが明らかになった。また、その関連メカニズムは、男女で異なることも明らかになった。

これらの関連を検討したところ、ジェンダー・アイデンティティが「理想自己のボディ・イメージ」の形成に影響を与えている可能性があること、自己愛的脆弱性が「理想自己のボディ・イメージ」と「現実自己のボディ・イメージ」との比較を促すことによって、瘦身願望に影響を与えている可能性が示唆された。

キーワード：瘦身願望、ジェンダー・アイデンティティ、性同一性、自己愛、高校生

第1章 序 論

第1節 問題の所在

摂食障害は大きく神経性無食欲症と神経性大食症の2つに分類され、神経性無食欲症は拒食を主症状とし、神経性大食症は過食を主症状とする。拒食と過食は相反するもののように捉えがちだが、水島(2001)は、拒食から過食に移行するケースが約60～70%見られること、症状の背景に「極端な瘦身願望」あるいは「肥満恐怖」が共通して存在することから、両者は症状の現れ方が異なるだけの同一疾患であると述べている。

瘦身願望とは、「自己の体重を減少させたり、体型をスリム化しようとする欲求であり、絶食、

薬物、エステなど様々なダイエット行動を動機づける心理的要因」と定義される（馬場・菅原，2000）。高校生の瘦身願望については，日本学校保健会が2006年に調査を実施している。全国13都府県の小・中・高校計51校の9,903人（うち高校生2,319人）を対象に調査を実施した結果，自分の体型のイメージについて，女子高校生の88.9%が「痩せたい」という願望を持っており，42.0%がダイエットの経験があるという結果であった。一方，男子高校生においては，37.3%が「痩せたい」という願望を持っており，11.6%がダイエットの経験があるという結果であった。

以上から，瘦身願望そのものは健常群であっても多くの高校生が抱えている願望であることが分かる。またダイエットを実行することも決して特別なことでないことが分かる。しかしながら瘦身願望がどのようなプロセスを経て，摂食障害への危険な食生活へ移行するかについては十分に解明されていない点が多い。現在では摂食障害は，諸々の生物学的要因・心理学的要因・社会文化的要因が複雑に絡み合って発症すると一般的には考えられており，そのため摂食障害については，生物学的・心理学的・社会文化的の様々な視点から研究が行われている。瘦身願望とダイエット行動の関係については，中原・林（2005）が，女子大学生において「ダイエット行動意図」へ最も強く影響するものは，「瘦身願望（主観的規範）」，「ダイエット行動への態度」，「ダイエット行動コントロール感」の3つの要因のうち，「瘦身願望（主観的規範）」であることを明らかにしている。このことから瘦身願望はダイエット行動及び摂食障害の発症に大きな影響を与えていることが分かる。瘦身願望に影響を与える心理的要因を詳細に検討していくことは，今後の摂食障害予防を考えるうえで重要である。

第2節 ジェンダー・アイデンティティと瘦身願望

馬場・菅原（2000）は，女子青年において，一般に伝統的な女性役割を受容している女性は瘦身のメリット感が高く，瘦身願望が高いことを述べている。鈴木・伊藤（2001）は，女子青年における女性性受容と摂食障害傾向について次のように報告している。①女性性受容が高いと自尊感情が高くなり摂食障害傾向が低くなる，②女性性受容が高いと身体満足度が高くなり摂食障害傾向が低くなる，③女性性受容が高いと異性意識が高くなり摂食障害傾向が高くなる。

浦上ら（2009）は，男子青年における異性意識と瘦身願望の相関は弱いとしている。しかしながら圓田（2004）は，男性摂食障害のモデルを4つ挙げ，それらすべてのモデルに男性らしさや男性的価値観，ジェンダー・アイデンティティが影響している可能性を述べている。

ジェンダー・アイデンティティについては，佐々木・尾崎（2007）が，それまでのジェンダー・アイデンティティの測定法は，ステレオタイプな性役割への志向性を示すものであり，ある性別に対するアイデンティティを測定しているわけではない，として，「斉一性・連続性をもった主観的な自分の性別が，周りから見られている社会的な自分の性別と一致するという感覚」という定義に基づいた新たなジェンダー・アイデンティティ尺度を作成した。今回はこの尺度を用いて，ジェンダー・アイデンティティが瘦身願望にどう影響を与えているのかという

ことを明らかにする。性役割受容や異性意識が瘦身願望に影響を与えていることは、先行研究において、しばしば述べられているとおりである。しかしながら、これまでの性役割受容尺度における、「育児は母親の喜びである」や「女性は愛嬌のある方がよい」といった項目に『はい』と回答する者は、女性という役割への志向性が強いということを示しているだけで、女性という性別へのアイデンティティが強いということを示しているわけではない。性役割と性同一性（ジェンダー・アイデンティティ）は、混同されがちであるが、それぞれ別の概念である。今回は性役割ではなく、より深層にある心理的要因と考えられる性同一性を取り上げ、それが瘦身願望に与える影響を明らかにすることを目的とする。

第3節 自己愛的脆弱性と瘦身願望

摂食障害の発症に自己愛の病理が存在している可能性があることは、たびたび報告されている。早川ら（1994）は、摂食障害群の自己所属感の脆弱性の背景には、自己愛的な体験の障害がうかがわれると述べている。梶（1998）は、過食症患者は自己愛的傷つきを埋め合わせるために過食すると述べている。生地（2000）は、大学の保健管理センターに来談する学生たちの中で、自己愛の病理が問題となるケースが増えてきた印象があるとし、1997年の来談75名のうち、狭い意味での自己愛型人格障害は1例のみであるが、摂食障害などのケースでも、自己愛的な性格傾向が問題となることは少なくないと思われると報告している。野間（2013, 2014）は、摂食障害の対人関係上の中核病理は自己愛性だと理解されることが多いとし、自己愛は、自己愛パーソナリティ障害に見られるような誇大的で攻撃的な自己愛と、強い羞恥を感じて批判を避けようとする繊細で脆弱な自己愛に分けられるといわれるが、摂食障害患者では脆弱性自己愛が優位であると述べ、摂食障害患者の自己愛とは、自己顕示傾向が強い「誇大型自己愛」ではなく、些細なことで傷つきやすい「脆弱型自己愛」であると述べている。

自己愛的脆弱性については、上地・宮下（2005, 2009）が、Kohut（1971, 1977）の視点に基づく自己愛的脆弱度尺度を作成した。上地・宮下（2005, 2009）は、自己愛的脆弱性を「自己愛的に脆弱な人は、他人に承認・賞賛や特別の配慮を求め、期待した反応が返ってこないときに心理的に不安定になりやすい傾向」と定義している。今回は、この自己愛的脆弱性が、瘦身願望にどう影響を与えているのかということを明らかにする。自己愛的脆弱性は先行研究において、瘦身願望と関連する重要な要因であると考えられているにもかかわらず、まだ実証的な研究がない。今回は自己愛的脆弱性が瘦身願望に与える影響について、その関連性を実証することを目的とする。

第4節 本研究の目的

本研究は、高校生における瘦身願望に影響を与える心理的要因について、これまでに明らかにされている瘦身願望に影響を与える心理的要因に加え、ジェンダー・アイデンティティ及び

自己愛的脆弱性がどのような影響を与えているかを実証し、その関連を明らかにすることを目的とする。

第2章 方 法

第1節 調査時期

調査時期は、2017年7月中旬であった。

第2節 調査対象

北陸地方の公立高校に在籍する高校2年生319名（男子199名、女子120名）を調査対象とした。1つでも欠損値のあるものを取り除いた最終有効回答数は、287名（男子181名、女子106名）であった。

第3節 調査内容

調査は、質問紙調査を実施した。

質問紙の調査内容は、質問紙の教示及び注意事項と学年・年齢の記入欄を含めたフェイスシート、第Ⅰ部が「痩身願望」を測定するための尺度、「体型に関するメリット感・デメリット感」を測定するための尺度、「身体満足度」を測定するための尺度、第Ⅱ部が「自己愛的脆弱度」を測定するための尺度、第Ⅲ部が身体的性別及び性自認を選択する質問、第Ⅳ部が「ジェンダー・アイデンティティ」を測定するための尺度、以上の構成からなっている。尺度については、以下の尺度を使用した。

（1）痩身願望尺度

馬場・菅原（2000）が作成した11項目の尺度を用いた。従来の食行動や摂食障害の尺度を参考に、体重や痩せることへのこだわりの表現を収集、整理改変し、痩身願望尺度として作成したものである。項目の内容は、ダイエット行動などの具体的なものではなく、「痩せたい」という意識の強さのみを測定できるように作成されたものであり、男性にも適用可能なものとなっている。回答は、「1. 当てはまらない」「2. やや当てはまらない」「3. どちらでもない」「4. やや当てはまる」「5. 当てはまる」の5件法で評定を求めた。

（2）体型に関するメリット感・デメリット感尺度

浦上ら（2009）が作成した痩身のメリット感と現体型に関するデメリット感の11項目を用いた。痩身に関するメリット感を尋ねる自己視点3項目と他者視点3項目、計6項目と、現体型のデメリット感を尋ねる5項目から構成される。回答は、「1. 当てはまらない」「2. やや当てはまらない」「3. どちらでもない」「4. やや当てはまる」「5. 当てはまる」の5件法で評定を求めた。

(3) 身体満足度尺度

鈴木・伊藤(2001)が作成した4項目を用いた。自己の身体に対する満足度を測定するために、自己の身体への満足感2項目と異性意識を考慮した2項目から構成されている。回答は、「1.当てはまらない」「2.やや当てはまらない」「3.どちらでもない」「4.やや当てはまる」「5.当てはまる」の5件法で評定を求めた。

(4) ジェンダー・アイデンティティ尺度

佐々木・尾崎(2007)によって作成された15項目の尺度を用いた。本尺度は、従来までの性役割や性志向などの観点から測定されてきたジェンダー・アイデンティティとは異なり、Eriksonのアイデンティティ理論に則って、ある性別へのアイデンティティ感覚を構成概念としている尺度であり、以下の高次2因子から構成されている。①一致一貫性の同一性(自己の性別が一貫しているという感覚に加え、自己の性別が他者の思う性別と一致しているという感覚)、②現実展望的の同一性(自己の性別が社会とつながりを持てているという感覚に加え、自己の性別での展望性が認識できているという感覚)。回答は、「1.全く当てはまらない」「2.ほとんど当てはまらない」「3.どちらかという当てはまらない」「4.どちらともいえない」「5.どちらかという当てはまる」「6.かなり当てはまる」「非常に当てはまる」の7件法で評定を求めた。

(5) 自己愛的脆弱度尺度

上地・宮下(2009)によって作成された20項目の尺度を用いた。上地・宮下(2005)は、Kohut(1971, 1977)の見解に基づき、過敏型自己愛傾向を測定する尺度として、自己愛的脆弱度尺度(NVS 原版)を作成した。今回の尺度はNVSの短縮版であり、以下の4つの下位尺度から構成されている。①自己顕示抑制(自己顕示に恥意識が伴いやすく、自己顕示を不自然に抑制する傾向)、②自己緩和不全(不安や抑うつを自分で調節する力が弱く他者にその緩和を期待する傾向)、③潜在的特権意識(他者に自分への特別扱いや特別の配慮を求める傾向)、④承認・賞賛過敏性(他者からの承認や賞賛に過敏で、それが得られないと傷つく傾向)。回答は、「1.まったくない」「2.めったにない」「3.たまにある」「4.ときどきある」「5.よくある」の5件法で評定を求めた。

第4節 調査手続き

筆者の勤務校において、無記名・集団法で実施した。調査にあたり、まず筆者より対象者全員に、調査についての説明及び協力依頼を行った。その際、調査は学校の教育活動とは全く独立したものであり、調査の協力は自由意思に任されること、調査に協力しないことで学校生活に不利益を被ることは一切ないこと、調査に同意していただける場合のみ回答することを口頭で伝えた。なお、上記の説明は質問紙のフェイスシートにも記載した。その後通常使用している教室に入り、クラス担任から質問紙を配付し、生徒に記入を依頼した。回収については、ク

ラスの全生徒が回答を終えているのを確認でき次第、クラス担任が一斉に回収した。

調査所要時間は、質問紙の配付、記入、回収を含めて約 20 分程度であった。

第 3 章 結 果

分析は統計ソフト IBM SPSS Statistics と Amos ver.24.0 を用いて行った。

第 1 節 尺度の検討

(1) 「痩身願望」に関する分析

痩身願望に関する 11 項目の構造を検討するため主成分分析を行った。その結果、馬場・菅原 (2000) と同様の構造が得られた。その結果を表 1 に示す。第 1 主成分の寄与率は 77.90% と高く、第 2 主成分以下の寄与率（第 2 主成分は 6.46%）を大きく上回っており、強い 1 次元構造が認められた。また、第 1 主成分に対する各項目の負荷量はすべて 0.70 以上と高いことから、これら 11 項目を痩身願望尺度の尺度項目として採用し、合計得点を算出して以下の分析に使用した。Cronbach の α 係数は、痩身願望尺度全体で $\alpha = 0.970$ と高い内的一貫性が認められた。

表 1 「痩身願望」に関する主成分分析結果

		N=287	$\alpha = .970$
項目内容			負荷量
1	体重が増えるのが怖い		.869
2	もっと痩せたいという思いで頭がいっぱいだ		.944
3	体重にとらわれている		.790
4	何が何でも体重を減らしたい		.937
5	もっと痩せていたらと悔やむことが多い		.919
6	体力が落ちてもとにかく痩せたい		.830
7	少しでも早く痩せたい		.927
8	痩せられると聞けば何でもする		.862
9	自分が痩せることを考えるとワクワクする		.909
10	体重を量ったときに減っていると嬉しい		.867
11	今、痩せることに一番興味がある		.841
		固有値	8.569
		寄与率(%)	77.900

(2) 「痩身のメリット感」に関する分析

痩身のメリット感に関する 6 項目の構造を検討するため主成分分析を行った。その結果を表 2 に示す。第 1 主成分の寄与率は 81.18% と高く、第 2 主成分以下の寄与率（第 2 主成分は 8.03%）を大きく上回っており、強い 1 次元構造が認められた。また、第 1 主成分に対する各項目の負荷量はすべて 0.80 以上と高いことから、これら 6 項目を痩身のメリット感の尺度項目として採用し、合計得点を算出して以下の分析に使用した。Cronbach の α 係数は、痩身のメリット感尺

度全体で $\alpha = 0.951$ と高い内的一貫性が認められた。

表2 「痩身のメリット感」に関する主成分分析結果

		N=287	$\alpha = .951$
項目内容			負荷量
1	今より痩せられたら、自分の体型や容姿に自信がもてる		.893
2	今より痩せられたら、健康になる		.844
3	今より痩せられたら、もっと自由にふるまえる		.945
4	今より痩せられたら、人前で明るくふるまえる		.949
5	今より痩せられたら、異性にもてる		.902
6	今より痩せられたら、人から信頼される		.868
		固有値	4.871
		寄与率(%)	81.178

(3) 「現体型のデメリット感」に関する分析

現体型のデメリット感に関する5項目の構造を検討するため主成分分析を行った。その結果を表3に示す。第1主成分の寄与率は79.53%と高く、第2主成分以下の寄与率（第2主成分は7.85%）を大きく上回っており、強い1次元構造が認められた。また、第1主成分に対する各項目の負荷量はすべて0.80以上と高いことから、これら5項目を現体型のデメリット感の尺度項目として採用し、合計得点を算出して以下の分析に使用した。Cronbachの α 係数は、現体型のデメリット感尺度全体で $\alpha = 0.934$ と高い内的一貫性が認められた。

表3 「現体型のデメリット感」に関する主成分分析結果

		N=287	$\alpha = .934$
項目内容			負荷量
1	今の体型のせいで、自分に自信がもてない		.913
2	今の体型のせいで、思うようにふるまえない		.880
3	今の体型のせいで、異性に注目されない		.827
4	今の体型のせいで、格好悪く見られる		.928
5	今の体型のせいで、他人よりも劣っている感じがする		.908
		固有値	3.976
		寄与率(%)	79.529

(4) 「身体満足度」に関する分析

身体満足度に関する4項目の構造を検討するため主成分分析を行った。その際、項目4（自分の体型にコンプレックスがある）の第1成分負荷量が、-.189という低い数値を示したことから、項目4を削除して再度分析を行った。その結果を表4に示す。なお、清原ら（2012）においても、項目4削除後の α 係数が高まるとして、項目4を除いて分析を行っている。

第1主成分の寄与率は71.85%と高く、第2主成分以下の寄与率（第2主成分は17.29%）を大きく上回っており、強い1次元構造が認められた。また、第1主成分に対する各項目の負荷

表 4 「身体満足度」に関する主成分分析結果

		N=287	$\alpha = .803$
項目内容		負荷量	
1 自分の身体が好きである		.874	
2 自分の身体に満足している		.871	
3 自分の身体は異性から見て魅力的だと思う		.796	
		固有値	2.156
		寄与率(%)	71.851

量はすべて 0.70 以上と高いことから、これら 3 項目を身体満足度の尺度項目として採用し、合計得点を算出して以下の分析に使用した。Cronbach の α 係数は、身体満足度尺度全体で $\alpha = 0.803$ と内的一貫性が認められた。

(5) 「ジェンダー・アイデンティティ」に関する分析

ジェンダー・アイデンティティ尺度の因子を確認するために、15 項目について最尤法、プロマックス回転による探索的因子分析を行った。その際、因子 1 “一致一貫的性同一性” に含まれる項目はすべて逆転項目、因子 2 “現実展望的性同一性” に含まれる項目はすべて逆転項目なしに揃えるため、項目 13（女性[男性・両性・どちらでもない性別]として自分らしく生きていくことは、現実の社会の中では難しいだろうと思う）を削除して分析を行った。その結果を表 5 に示す。Cronbach の α 係数は、一致一貫的性同一性で $\alpha = 0.913$ 、現実展望的性同一性で $\alpha = 0.943$ と高い内的一貫性が認められた。

表 5 「ジェンダー・アイデンティティ」に関する因子分析結果

		N=287	
項目内容		因子 1	因子 2
因子 1 一致一貫的性同一性 ($\alpha = .913$)			
*14 自分の性別に迷いを感じることもある		.940	.048
*15 人前での自分の性別は、本当の自分の性別ではないような気がする		.888	-.001
*11 今のままでは次第に自分の性別がわからなくなっていくような気がする		.882	.048
*7 いつからか、自分の性別がわからなくなってしまったような気がする		.758	.008
*12 女性(男性・両性・どちらでもない性別)としての自分は、人には理解されないだろう		.725	-.039
*1 過去において、自分の性別に自信がもてなくなったことがある		.655	-.012
*9 人に見られている自分の性別と本当の自分の性別は一致していないと感じる		.651	-.117
*4 過去において、自分の性別をなくしてしまったような気がする		.528	.001
因子 2 現実展望的性同一性 ($\alpha = .943$)			
8 自分が女性(男性・両性・どちらでもない性別)としてすべきことが、はっきりしている		.026	.924
6 現実の社会の中で、女性(男性・両性・どちらでもない性別)として、自分らしい生き方ができると思う		.039	.921
10 現実の社会の中で、女性(男性・両性・どちらでもない性別)として、自分の可能性を十分に実現できると思う		.042	.902
5 自分が女性(男性・両性・どちらでもない性別)としてどうなりたいかはっきりしている		-.028	.888
3 現実の社会の中で、女性(男性・両性・どちらでもない性別)として、自分らしい生き方ができると思う		-.048	.780
2 自分が女性(男性・両性・どちらでもない性別)として望んでいることがはっきりしている		-.084	.711
		固有値	5.250 4.560
		寄与率(%)	32.264 33.018
		因子間相関	-.050
*は逆転項目			

(6)「自己愛的脆弱度」に関する分析

自己愛的脆弱度尺度の因子を確認するために、20項目について最尤法、プロマックス回転による探索的因子分析を行った。その結果、上地・宮下(2009)と同様の因子構造が得られた。その結果を表6に示す。Cronbachの α 係数は、潜在的特権意識で $\alpha = 0.918$ 、自己顕示抑制で $\alpha = 0.919$ 、自己親和不全で $\alpha = 0.920$ 、承認・賞賛過敏性で $\alpha = 0.891$ と内的一貫性が認められた。

表6 「自己愛的脆弱度」に関する因子分析結果

		N=287			
項目内容		因子1	因子2	因子3	因子4
因子1 潜在的特権意識($\alpha=.918$)					
14	まわりの人の態度を見ていて、こちらへの配慮が足りないと思うことがある	.943	.065	.032	-.171
12	まわりに人に対して「もっと私の発言を尊重してほしい」と思うことがある	.924	-.024	.007	-.020
11	他の人が私に接するときの態度が丁寧ではないので、腹が立つことがある	.820	.081	.008	-.043
13	まわりに人に対して「もっと私の気持ちを考えてほしい」と思うことがある	.789	-.045	.028	.099
15	私は、周囲の人がもっと私の能力を認めてくれたらいいのと思う	.503	-.080	-.090	.467
因子2 自己顕示抑制($\alpha=.919$)					
2	「自分のことを話すぎた」と思って、自己嫌悪におちいることがある	-.007	.972	.011	-.087
1	人と話した後に「あんなに自分を出すのではなかった」と後悔することがある	-.001	.946	.025	-.120
3	人前で自分のことを話したあとに、話した内容について後悔することがある	-.009	.832	-.043	.082
4	だれかと話しているときには、自分の話題で時間を取りすぎではいけないと思って気にしている	.052	.665	-.085	.170
5	他の人に自分のことを自慢するような話をしたあとで、後味の悪い感じが残ることがある	.065	.622	.086	.101
因子3 自己緩和不全($\alpha=.920$)					
8	精神的に不安定になっているときには、だれかと話をしないと落ち着くことができない	-.001	-.009	.876	.015
7	悩みや心配事があるときには、自分の中にとどめておけなくて、すぐだれかに話したくなる	-.004	.025	.862	-.030
9	つらいことや苦しいことがあるときには、身近な人にそれを理解してほしいと強く期待する	.053	-.109	.855	.041
10	不安を感じているときには、だれかから大丈夫だと言ってもらわないと安心できない	.062	.065	.759	.022
6	悩んだり落ち込んだりしたときに相談できる人が身近にいないと、私は生きていけないと思う	-.010	.026	.721	.067
因子4 承認・賞賛過敏性($\alpha=.891$)					
16	自分の発言や行動が他の人から良く評価されていないと、そのことが気になってしかたない	.149	-.118	.025	.767
19	相手が私を避けているように思えると、私は非常に落ち込んでしまう	-.023	.024	.073	.751
20	他の人から批判されると、そのことが長い間ずっと頭にこびりついて離れない	-.115	.261	.050	.659
17	自分の良い所をほめられたり認められたいしなく、自分に自信がもてない	-.040	.105	.143	.651
18	他の人が私の発言や行動に注目してくれないと、自分が無視されているように感じることもある	.364	.070	.018	.472
固有値		10.241	2.236	1.801	.905
寄与率(%)		49.570	9.895	7.606	3.066
因子1			.431	.536	.677
因子間相関				.500	.613
因子2					.692
因子3					

第2節 性差の検討

各尺度得点・各因子得点において、性差がみられるかどうかを検討するために、対応のない t 検定を行った。その結果を表7に示す。

「瘦身願望」「瘦身のメリット感」「現体型のデメリット感」「自己顕示抑制」「自己緩和不全」「潜在的特権意識」「承認・賞賛過敏性」「現実展望的性同一性」において、有意差がみられた。一方で、「身体満足度」と「一致一貫的性同一性」については、有意差はみられなかった。

「瘦身願望」「瘦身のメリット感」「現体型のデメリット感」においては、女子の得点が男子よりも有意に高いという結果になった。加えて自己愛的脆弱性においても、「自己顕示抑制」「自己緩和不全」「潜在的特権意識」「承認・賞賛過敏性」の4因子すべてにおいて、女子の得点が男子よりも有意に高いという結果となった。また「現実展望的性同一性」においても、女子の得点が男子よりも有意に高かった。

表7 各下位尺度得点における性差の検討

	男子			女子			t値		
	n	平均値	SD	n	平均値	SD			
1 瘦身願望	181	15.57	7.98	106	34.17	12.30	14.19	***	女子>男子
2 瘦身のメリット感	181	8.15	4.58	106	16.32	6.72	11.09	***	女子>男子
3 現体型のデメリット感	181	7.61	4.44	106	12.73	5.54	8.12	**	女子>男子
4 身体満足度	181	6.73	3.00	106	6.30	2.80	1.19		
自己愛的脆弱性									
5 自己顕示抑制	181	11.48	4.81	106	16.32	4.95	8.14	***	女子>男子
6 自己緩和不全	181	10.13	4.79	106	15.10	5.73	7.53	***	女子>男子
7 潜在的特権意識	181	9.82	4.52	106	11.78	4.95	3.42	***	女子>男子
8 承認・賞賛過敏性	181	10.28	4.89	106	14.11	4.46	6.62	***	女子>男子
ジェンダー・アイデンティティ									
9 現実展望的性同一性	181	23.31	12.59	106	27.94	9.14	3.59	***	女子>男子
10 一致一貫的性同一性	181	51.58	8.01	106	51.11	7.96	0.48		

*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$

第3節 各尺度間の関連分析

各尺度間の関係を調べるため、共分散構造分析を行った。なお、男子と女子で「瘦身願望」「瘦身のメリット感」「現体型のデメリット感」「自己顕示抑制」「自己緩和不全」「潜在的特権意識」「承認・賞賛過敏性」「現実展望的性同一性」において、得点に有意差があり、関連メカニズムにも先行研究を踏まえると差異があると予想されることから、分析は男女別に行った。

(1) 女子における各尺度間の関連分析

女子における各尺度間の関係を調べるため、共分散構造分析を行った。その結果を図1に示す。最初は“ジェンダー・アイデンティティ尺度の2因子”及び“自己愛的脆弱性尺度の4因子”を用いてパスを引いて分析を行った。しかし、各パス係数の値が小さく有意にならなかったことから、繰り返しパスを引き直す等の分析を行い、最適なモデルを導いた（図1）。モデルの適合度は、 $\chi^2 = 8.083$ ，自由度 = 7，有意確率 = .325，適合度指標 GFI = .975，AGFI = .926

と良好であった。

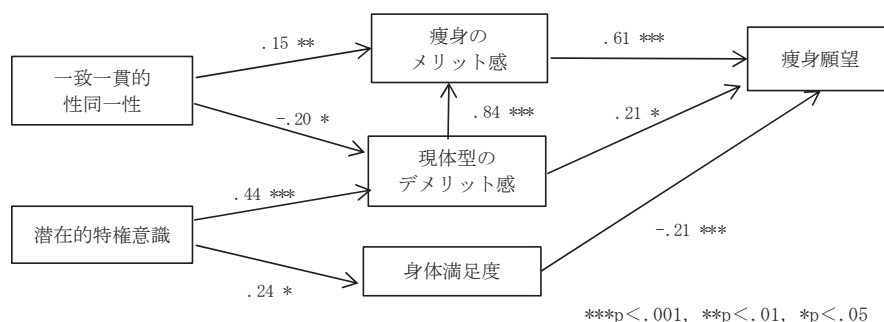


図1 女子高校生における瘦身願望を規定する諸要因のパス図
(有意でないパスは省略)

(2) 男子における各尺度間の関連分析

男子における各尺度間の関係を調べるため、共分散構造分析を行った。その結果を図2に示す。最初は“ジェンダー・アイデンティティ尺度の2因子”及び“自己愛的脆弱性尺度の4因子”を用いてパスを引いて分析を行った。しかし、各パス係数の値が小さく有意にならなかったことから、繰り返しパスを引き直す等の分析を行い、最適なモデルを導いた(図2)。モデルの適合度は、 $\chi^2 = 6.667$, 自由度 = 4, 有意確率 = .155, 適合度指標 GFI = .985, AGFI = .943 と適合度は良好であった。

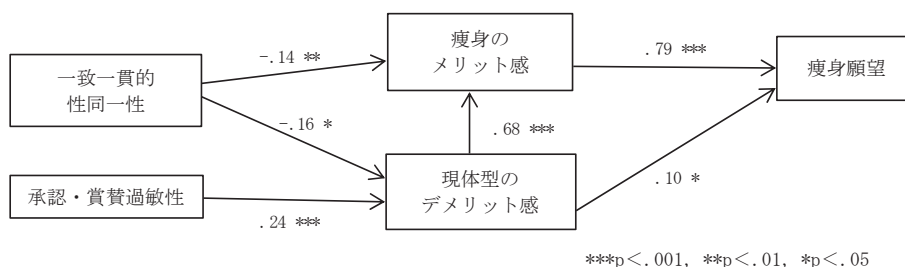


図2 男子高校生における瘦身願望を規定する諸要因のパス図
(有意でないパスは省略)

第4章 考 察

第1節 女子高校生の瘦身願望を規定する心理的要因の検討

女子高校生において、瘦身願望に直接影響している要因は、「瘦身のメリット感」「現体型のデメリット感」「身体満足度」の3つであった。加えて「現体型のデメリット感」が「瘦身のメリット感」を介して瘦身願望を高めるというパスが確認された。これらは女子大学生を対象に

した清原ら（2012）の研究と同じ結果である。また、「瘦身のメリット感」が瘦身願望に直接影響を与えていることについては、女子大学生を対象にした馬場ら（2000）及び中原ら（2005）の研究と同じ結果である。

今回の研究において、女子高校生の瘦身願望に影響を与えるルートには、①「瘦身のメリット感」が直接影響を与えるルート、②「現体型のデメリット感」が直接影響を与えるルート、③「身体満足度」が直接影響を与えるルート、④「現体型のデメリット感」が「瘦身のメリット感」を介して、瘦身願望を高めるルート、の4つがあることが明らかになった。

第2節 男子高校生の瘦身願望を規定する心理的要因の検討

男子高校生において、瘦身願望に直接影響している要因は、「瘦身のメリット感」と「現体型のデメリット感」であった。これは男子大学生を対象にした浦上ら（2009）及び清原ら（2012）の研究と同じ結果である。また、「現体型のデメリット感」が「瘦身のメリット感」を介して瘦身願望を高めるというパスが確認された。これは浦上らの研究と同じ結果である。

今回の研究において、男子高校生の瘦身願望に影響を与えるルートには、①「瘦身のメリット感」が直接影響を与えるルート、②「現体型のデメリット感」が直接影響を与えるルート、③「現体型のデメリット感」が「瘦身のメリット感」を介して、瘦身願望を高めるルート、の3つがあることが明らかになった。なお、この関連は本研究の女子でも同じであった。

第3節 ジェンダー・アイデンティティと瘦身願望の関連

本研究は佐々木・尾崎（2007）が、それまでのジェンダー・アイデンティティの測定法は、ステレオタイプな性役割への志向性を示すものであり、ある性別に対するアイデンティティを測定しているわけではない、として、「斉一性・連続性をもった主観的な自分の性別が、周りから見られている社会的な自分の性別と一致するという感覚」という定義に基づいて作成した尺度を用いて調査を実施した。その結果、男女とも「一致一貫的性同一性（＝自己の性別が一貫しているという感覚に加え、自己の性別が他者の思う性別と一致しているという感覚）」が、「瘦身のメリット感」及び「現体型のデメリット感」に影響していることが明らかにされた。今回の調査では、「一致一貫的性同一性」と「現体型のデメリット感」は男女ともに負の相関、しかしながら、「一致一貫的性同一性」と「瘦身のメリット感」は女子が正の相関、男子が負の相関となり、男女で逆の結果となった。

女子においては、一致一貫的性同一性が高まると瘦身のメリット感が高くなる。その理由には、一致一貫的性同一性が高い女子は、「瘦せている体＝女性らしい体」または「瘦せている体＝美しい体」と受けとめられ、自己も他者もそのように考えていると思ひ込むことで、瘦身であれば、より女性らしさや美しさを得ることができると感じて、瘦身のメリット感が高まり、瘦身願望が高まると考えることができる。男子においては、一致一貫的性同一性が高まると瘦身

のメリット感が低くなる。その理由には、一致一貫的性同一性が高い男子は、痩身への関心が低いことが考えられた。男子の場合は女子と異なり、社会文化的な痩身への圧力が少ないことが背景にあると考えられる。また「痩身＝男性らしい体」と考えていない可能性が考えられた。男子は「筋肉質の体＝男性らしい体」であり、「痩せている体＝貧弱な体」と捉えられている可能性がある。いずれにしても「痩身のメリット感」は、男女ともに痩身願望に直接影響を与えている要因であり、「一致一貫的性同一性」との相関が、女子が正、男子が負と、性別によって異なるということは興味深い結果となった。性差があるということは、「痩身＝痩せている体」に対する「メリット感＝利点」が男女で異なっている、ということの意味するからである。一致一貫的性同一性が高い女子は、「女性らしい体」にメリットを感じ、一致一貫的性同一性が高い男子は、「男性らしい体」にメリットを感じると考えるのが妥当である。「痩身＝女性の理想の体型」ではあるが、「痩身≠男性の理想の体型」ではないと仮定すれば、「一致一貫的性同一性」と「痩身のメリット感」の関連が男女で異なる理由が理解できる。

また、男女とも一致一貫的性同一性が高いと現体型のデメリット感が低くなった。その理由として、一致一貫的性同一性の確立は、現体型のデメリット感を感じにくくさせる作用があるからと考えられる。一致一貫的性同一性が高いということは、女性は「自己も他者も女性と思っている」、男性は「自己も他者も男性と思っている」という状態にストレスがない、ということが挙げられる。このことは、生得的に女性らしい体型、もしくは男性らしい体型であることにデメリットを感じにくくする要因であると考えられる。すなわち、女性は皮下脂肪のついた丸みを帯びた体型にデメリットを感じにくく、男性は筋肉質のごつごつした体型にデメリットを感じる事が少ない。生得的な自分の体型に「デメリット感」を感じにくいことは、自らの体型を受け入れる上で、大きなアドバンテージである。また一致一貫的性同一性が高い者は、性同一性を含むアイデンティティそのものが確立している可能性も考えられる。自らの性別に加え、それに伴う自らの性別としての体型、そしてかけがえない個人としての自らの体型についてのアイデンティティを確立することで、現体型のデメリット感が低くなった可能性が考えられた。

第4節 自己愛的脆弱性と痩身願望の関連

本研究は、上地・宮下(2005, 2009)が、自己愛的脆弱性を「自己愛的に脆弱な人は、他人に承認・賞賛や特別の配慮を求め、期待した反応が返ってこないときに心理的に不安定になりやすい」という定義に基づいて作成した尺度を用いて調査を実施した。その結果、女子においては、①「潜在的特権意識」が高まると、「身体満足度」が高まること、②「潜在的特権意識」が高まると、「現体型のデメリット感」が高まること、が明らかになった。男子においては、「承認・賞賛過敏性」が高まると、「現体型のデメリット感」が高まること明らかになった。先行研究において、摂食障害の発症に自己愛の病理が存在している可能性があることは、たびたび

報告されていたが、今回の研究によって、自己愛的脆弱性と瘦身願望の関連が、「現体型のデメリット感」などを介して実証される結果となった。今回の調査では、女子においては「潜在的特権意識」、男子においては「承認・賞賛過敏性」が、「現体型のデメリット感」などとの関連が見いだされ、これにより男女とも自己愛的脆弱性が間接的な形ではあるが瘦身願望に影響していることが明らかになった。しかもその自己愛的脆弱性の内容と影響は、男女で異なっていることも明らかになった。

女子においては、潜在的特権意識が高まると、①現体型のデメリット感が高まり、瘦身願望が高くなる、②身体満足度が高まり、瘦身願望が低くなる、という矛盾した結果が示されている。このような結果が生じるのは、女子が「現在の体型」を「理想の体型」と比較して、「近い」あるいは「遠い」と、どのように感じるかによって、瘦身願望への影響が異なるためと考えられた。女子の場合、自身が瘦身である場合は、潜在的特権意識（他者に自分への特別扱いや特別の配慮を求める傾向）が高くても、自身がすでに瘦身であることによって「身体満足度」が高まるとともに、「瘦身である自分」は、他者に自分への特別扱いや特別の配慮を受けやすい存在であると感じることで、瘦身願望が低くなると考えることができる。このように、潜在的特権意識が身体的満足度を高めることには問題はないが、パス係数の数値は、「潜在的特権意識」から「現体型へのデメリット感」へは.44 ($p < .001$)、「潜在的特権意識」から「身体満足度」へは.24 ($p < .05$)となっており、「現体型のデメリット感」により強く作用しがちであると考えられた。

男子においては、承認・賞賛過敏性が高まると、現体型のデメリット感が高まり、瘦身願望が高まることが明らかになった。浦上らは、①「賞賛獲得欲求」が高いと瘦身のメリット感（他者視点のメリット感+自己視点メリット感）が高まって瘦身願望が高まること、②「拒否回避欲求」が高いと現体型のデメリット感が高まって瘦身願望が高まること、を明らかにしている。また「賞賛獲得欲求」と「拒否回避欲求」の間には、正の相関があることを明らかにしている。「承認・賞賛過敏性」は、「他者からの承認や賞賛に過敏で、それが得られないと傷つく傾向」を表しており、承認・賞賛過敏性が高いと、現体型のデメリット感が高まるという本研究の結果は、瘦身願望における承認・賞賛過敏性が、「他者に注目、賞賛されたい」という賞賛獲得欲求よりも、「他者からの否定的な評価を避けたい」という拒否回避欲求に近いことを示す結果となった。このことは、野間（2013, 2014）が述べる、摂食障害患者の自己愛とは自己顕示傾向が強い「誇大型自己愛」ではなく、些細なことで傷つきやすい「脆弱型自己愛」であることにつながる。承認・賞賛過敏性が高い男子は、体型についても他者からの承認や賞賛に過敏で、そのことで傷つくことを避けようとして、「現体型のデメリット感」が高まると考えられる。

第5節 ジェンダー・アイデンティティに揺らぎがある事例の検討

本研究において、分析対象者のうち、身体的性別（『あなたの身体的性別＝出生時に割り当て

られた性別はどれですか?』の回答)と性自認(『あなたは自分の性別をどれと認めていますか?』の回答)が一致しなかった者は女子4名、男子2名、計6名であった。身体的性別と性自認が一致しない者を「ジェンダー・アイデンティティに揺らぎがある者」として、その各尺度の得点を表8及び表9に示す。

男女6例のうち、性自認が「両性」と回答した3名については、瘦身願望得点が、それぞれの身体的性別における平均値を下回る結果となった。「どちらでもない」と回答した3名については、1名が平均値並み、2名が平均値を上回る結果となった。このことから、「両性」と回答した者は、少なからず男性らしい体を求める傾向があり、そのために瘦身願望が低下するのではないかと考えられた。

表8 ジェンダー・アイデンティティに揺らぎがある者の得点(女子)

身体的性別	全体平均	事例平均	事例1	事例2	事例3	事例4
	女性	女性	女性	女性	女性	女性
性自認	女性102名 他4名	両性・どちらでもない 各2名	両性	両性	どちらでもない	どちらでもない
1 瘦身願望	34.17	33.75	21.00	28.00	33.00	53.00
2 瘦身のメリット感	16.32	10.75	6.00	9.00	12.00	16.00
3 現体型のデメリット感	12.73	11.75	7.00	5.00	14.00	21.00
4 身体満足度	6.30	7.00	7.00	13.00	5.00	3.00
自己愛的脆弱性						
5 自己顕示抑制	16.32	20.75	12.00	25.00	21.00	25.00
6 自己緩和不全	15.10	9.75	6.00	19.00	9.00	5.00
7 潜在の特権意識	11.78	9.00	8.00	13.00	10.00	5.00
8 承認・賞賛過敏性	14.11	11.25	6.00	12.00	13.00	14.00
ジェンダー・アイデンティティ						
9 現実展望の性同一性	27.94	19.00	23.00	23.00	15.00	15.00
10 一致一貫の性同一性	51.11	34.75	30.00	37.00	43.00	29.00

表9 ジェンダー・アイデンティティに揺らぎがある者の得点(男子)

身体的性別	全体平均	事例平均	事例1	事例2
	男性	男性	男性	男性
性自認	男性179名 他2名	両性・どちらでもない 各1名	両性	どちらでもない
1 瘦身願望	15.57	13.50	11.00	16.00
2 瘦身のメリット感	8.15	9.50	6.00	13.00
3 現体型のデメリット感	7.61	5.00	5.00	5.00
4 身体満足度	6.73	5.00	7.00	3.00
自己愛的脆弱性				
5 自己顕示抑制	11.48	9.50	5.00	14.00
6 自己緩和不全	10.13	5.50	5.00	6.00
7 潜在の特権意識	9.82	5.50	5.00	6.00
8 承認・賞賛過敏性	10.28	5.50	5.00	6.00
ジェンダー・アイデンティティ				
9 現実展望の性同一性	23.31	33.00	42.00	24.00
10 一致一貫の性同一性	51.58	19.50	14.00	25.00

第6節 総合考察

今回の研究で、ジェンダー・アイデンティティ及び自己愛的脆弱性が、高校生の瘦身願望に与えている影響が明らかになった。

ジェンダー・アイデンティティについては、「一致一貫的性同一性」が、「瘦身のメリット感」及び「現体型のデメリット感」に影響を与えていた。「瘦身のメリット感」に与える影響については、女子は「一致一貫的性同一性」が高いと「瘦身のメリット感」が高まるが、逆に男子は「一致一貫的性同一性」が高いと「瘦身のメリット感」は低くなり、男女で逆の結果となった。これは「瘦身＝女性の理想の体型」であり、「男性の理想の体型＝筋肉質の体」と考えられることで、「瘦身≠男性の理想の体型」と受けとめられている可能性が考えられた。また、今回の調査でジェンダー・アイデンティティに揺らぎがある者のうち、性自認を「両性」と回答した者は、瘦身願望が低かった。このことは、僅かでも「男性らしい体」を求める場合は、瘦身願望が低くなる傾向があると考えられた。

自己愛的脆弱性については、女子においては、「潜在的特権意識」が、「身体満足度」を高め、瘦身願望を低くしていると同時に、「現体型のデメリット感」を高めていた。男子においては「承認・賞賛過敏性」が、「現体型のデメリット感」を高めていた。男女とも、自己愛的脆弱性に加え、現在の自分の体型を、「理想の体型に近い」と評価するか、「理想の体型に遠い」と評価するかによって、瘦身願望への影響が異なっていく可能性が考えられる。

中原ら（2005）は、女性において、「メディアからの影響」が直接瘦身願望に影響を与えることを明らかにしている。浦上ら（2013）は、男女ともに、「記事の影響」が瘦身願望の内在化に影響を与えていることを明らかにしている。今後は、「理想自己のボディ・イメージ」が個人の内面で、どのように形成されているかを検討していく必要性を感じた。「理想自己のボディ・イメージ」とは、今回は「個人が非常にそうありたいと望んでおり、それに最も近い自己の身体像」と定義する。「メディアからの影響」や「記事の影響」により、「女性としての理想の体型」「男性としての理想の体型」の価値観が内在化し、その価値観にうえに、自己の評価基準としての「理想自己のボディ・イメージ」が形成されると考えられる。個人の内面で「理想自己のボディ・イメージ」が形成される際に、ジェンダー・アイデンティティの影響を受けると考えられる。「一致一貫的性同一性」の高い者は、より「女性らしい体」「男性らしい体」に身体をイメージする。特に女性においては、「瘦身＝女性の理想の体型」の価値観によって、瘦身に傾くと考えられる。このようにして、個人の内面で「理想自己のボディ・イメージ」が形成され、そうした「理想自己のボディ・イメージ」と「現実自己のボディ・イメージ＝現体型」との比較が個人の内面で行われ、「現実自己のボディ・イメージ」が「理想自己のボディ・イメージ」に比べて「遠い」と感じた場合に、「瘦身のメリット感」が高まり、瘦身願望が高まっていく可能性が考えられる。しかしながら、「一致一貫的性同一性」が高いほど、より女性的、あるいはより男性的な「理想自己のボディ・イメージ」を形成するかといえば必ずしもそうとはいえない。

アイデンティティそのものが確立しており、「理想自己のボディ・イメージ」が「現実自己のボディ・イメージ」とあまりズレなく形成される場合は、「現実自己のボディ・イメージ」が「理想自己のボディ・イメージ」に近づくため、「現体型のデメリット感」が低下すると考えられる。

そして、「理想自己のボディ・イメージ」と「現実自己のボディ・イメージ」との比較を促進する要因に、自己愛的脆弱性が存在すると考えられる。女子においては、「潜在的特権意識」が高いと、「現実自己のボディ・イメージ」と「理想自己のボディ・イメージ」との比較が促され、自己の心理のなかで「現実自己のボディ・イメージ」が「理想自己のボディ・イメージ」に近いと感じた場合は、「身体満足度」を高めて、瘦身願望を低くすると考えられる。逆に「現実自己のボディ・イメージ」が「理想自己のボディ・イメージ」と離れていると感じた場合は、「現体型のデメリット感」を高めて、瘦身願望を高めると考えられる。また男子においては、「承認・賞賛過敏性」が高いと、「現実自己のボディ・イメージ」と「理想自己のボディ・イメージ」との比較が促され、「現実自己のボディ・イメージ」が「理想自己のボディ・イメージ」に遠いと感じた場合は、「現体型のデメリット感」を高めて、瘦身願望を高めると考えられる。

本研究において、ジェンダー・アイデンティティと自己愛的脆弱性が瘦身願望に影響を与えていることが実証された。しかしながら本研究において、ボディ・イメージとの関連についての実証がなされたわけではない。ジェンダー・アイデンティティについては、ボディ・イメージの形成に影響を与えている可能性を示唆されたにすぎない。ボディ・イメージの形成には「メディアからの影響」も大きいと考えられ、ジェンダー・アイデンティティがボディ・イメージの形成に影響を与えるメカニズムについては、今後の研究において明らかにする必要があると考える。また、自己愛的脆弱性についても「理想自己のボディ・イメージ」と「現実自己のボディ・イメージ」との比較を促すことで瘦身願望に影響を与えている可能性を示唆されたにすぎず、こちらも今後の研究において、その関連を明らかにする必要があると考える。また、本研究においては、現体型が肥満の者も瘦身の者も、すべて区別することなく統計的处理を行った。しかしながら、男女問わず肥満の者は、「瘦身のメリット感」は当然高まるであろうし、逆に瘦身の者は、「瘦身のメリット感」は低くなることは予想される。個人の「現体型」を主観を交えずに正確に把握するとともに、「理想体型」をどのようにして把握し、検討していくかが今後の課題である。

〔引用文献〕

- 馬場安希・菅原健介 (2000). 女子青年における瘦身願望についての研究. 教育心理学研究, 48 (3), 267-274
- 圓田浩二 (2004). 摂食障害男性の原因論. 沖縄大学人文学部紀要, 5, 55-64
- 早川滋人・古賀恵理子・小林豊生・中嶋照夫 (1994). 摂食障害患者の自己愛と自己所属感について. 心身医, 34, 76
- 生地新 (2000). 現代の大学生における自己愛の病理. 心身医, 40 (3), 192-197

- 梶 徹（1998）．自己愛病理からみた摂食障害の理解と治療．心身医，38（2），156-157
- 清原直彦・檜山美希・本田未菜美・西村太志（2012）．男女大学生における瘦身願望に影響を与える心理的要因の検討．広島国際大学心理臨床センター紀要，11，11-20
- 水島広子（2001）．やせ願望の精神病理－摂食障害からのメッセージ．PHP 研究所
- 日本学校保健会（2008）．平成 18 年度児童生徒の健康状態サーベイランス事業報告書．財団法人日本学校保健会
- 中原純・林知世（2005）．女子大学生はなぜダイエットをするのか（1）－計画的行動理論（TPB: Theory of Planned Behavior）を用いた，ダイエット行動のメカニズムの解明－．生老病死の行動科学，10，71-85
- 中原純・林知世（2005）．女子大学生はなぜダイエットをするのか（2）－計画的行動理論（TPB: Theory of Planned Behavior）を用いた，ダイエット行動のメカニズムの解明－．生老病死の行動科学，10，87-100
- 野間俊一（2013）．摂食障害治療の過去・現在・未来．臨床精神医学，42（5），513-517
- 野間俊一（2014）．総合病院における摂食障害の治療と工夫．臨床精神医学，43（6），841-845
- 佐々木掌子・尾崎幸謙（2007）．ジェンダー・アイデンティティ尺度の作成．パーソナリティ研究，15（3），251-265
- 鈴木幹子・伊藤裕子（2001）．女子青年における女性性受容と摂食障害傾向－自尊感情，身体満足度，異性意識を媒介として－．青年心理学研究，13，31-46
- 上地雄一郎・宮下一博（2009）．対人恐怖傾向の要因としての自己愛的脆弱性，自己不一致，自尊感情の関連性．日本パーソナリティ心理学会，17（3），280-291
- 浦上涼子・小島弥生・沢宮容子・坂野雄二（2009）．男子青年における瘦身願望についての研究．教育心理学研究，2009，57（3），263-273
- 浦上涼子・小島弥生・沢宮容子（2013）．男子青年における瘦身理想の内在化と瘦身願望との関係についての検討．教育心理学研究，61（2），146-157

〔付記〕

本論文は平成 29 年度に佛教大学教育学研究科に提出した修士論文を加筆・修正したものである。また本研究は，佛教大学「人を対象とする研究」倫理審査委員会の承認を得ている（承認番号 H29-12）。

〔謝辞〕

本研究にあたりまして，懇切丁寧なご指導を賜りました近藤日出夫先生に深く感謝申し上げます。またご協力いただきました生徒の皆様，先生方に厚くお礼申し上げます。

（ごとう ゆうな 教育学研究科臨床心理学専攻通信修士課程修了）
（指導教員：近藤 日出夫 教授）

2018 年 9 月 12 日受理